中国の「高齢者サービス・マネジメント」を専攻する学生の認知症に関する意識調査

Awareness survey on major neurocognitive disorder targeting students majoring in geriatric service and management in China

陳　　容　CHEN Rong[1)]
横山正博　YOKOYAMA Masahiro[2)]

1）山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士前期課程
2）山口県立大学大学院健康福祉学研究科

1）Master's Program, Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University
2）Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

キーワード　中国　認知症　高齢者介護人材養成

Ⅰ　研究の背景と目的

2020年の中国「第7回人口センサス」[1]によれば、65歳以上人口は13.5%を占め、現在ではすでに高齢社会になっていることが推測される。また、中国老齢協会の推計によると2020年の60歳以上の認知症患者は約1,507万人、さらに2030年には2,220万になると推計されている[2]。今後認知症高齢者に対する介護サービスは、急速な需要が見込まれる。

近年、中国においても日常生活の中で認知症高齢者が行方不明となり、その防止のために連絡先を記した行方不明防止服を着用するケースが増えている。しかし、多くの住民は、認知症の原因疾患、中核症状や認知症の行動・心理症状（BPSD）やケアの方法などについて正しい認識が十分ではないと推測される。

日本では、厚生労働省は2012年に「認知症対策推進5ヵ年計画（オレンジプラン）」、2015年に「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）を発表した。さらに、2019年に認知症施策推進関係閣僚会議において、「認知症施策推進大綱」がとりまとめられた。「認知症施策推進大綱」では、認知症は誰もがなりうるものであり、多くの人にとって身近なものとなっている現況を踏まえ、周囲や地域の理解と協力の下、認知症の人の尊厳が守られ、自分らしく暮らし続けることができる社会を目指している。

一方、中国においては、2018年上海民政局と市財政局が共同で策定した「認知症介護病床設置作業計画（試行）」の「認知症介護病床設置要領」において、「認知症」の表記において、差別的な用語をサービスの場所に表示してはならないと規定された[3]。このような動向が中国全土に広まり、認知症の正しい理解のための普及啓発がさらに必要な状況にある。また、中国全土において今後増大する認知症の人に対するケアの質を向上させ、認知症ケアに強みを発揮できる介護の専門人材の養成システムの方向性や教育プログラムの開発が求められている。

以上を背景として、今後中国の高齢者を支えていく若い世代が、認知症に対してどのような意識をもっているかを調査し、中国における高齢者介護の専門人材養成の課題を示すことを目的とした。

Ⅱ　研究の方法

1.研究デザイン

調査票に基づく横断的調査とした。

2.調査対象

中国湖南省の「高齢者サービスとマネジメント」を専攻する大専及び中専の2年生と3年生を対象とした。なお、大専は日本における短期大学、中専は専門学校に該当する。

湖南省は中国南東部、長江中下流、洞庭湖の南に位置する湖南省の常住人口は6,644万4,900人、60歳以上の人口は1,321万1,000人であり、人口の19.88%を占めている[4]。その内、65歳以上の人口は984万2,100人で14.81%を占めている[4]。中国全土の認知症高齢者数の割合から、湖南省では単純に60歳以上の認知症高齢者が約70万人いると推計される。

3.調査方法

調査対象者の所属する各学校の縁故関係のある教員に対して、調査の依頼を行った。同意が得られた場合、当該教員からオンライン調査の機能を持つ「問卷星」を活用して、対象者個別に対してweb調査票への記入と送信を依頼した。調査票は、全て中国語で記載した。調査項目への回答および送信をもって、研究参加の同意を得たものとした。回答は無記名とした。回答数は603であり、すべて有効回答と判断された。

4.調査期間

2022年8月5日から2022年8月10日の期間に実施した。

5.調査内容

性別、所属学校の形態と学年、認知症の人とかかわった経験や認知症の学習方法、及び「認知症の人をケアするときの配慮」12項目、「認知症の基礎知識」7項目、「認知症に対する考え」6項目及び「将来に対する考え方」3項目とした。

6.分析方法

各質問項目について、単純集計を行った。

7.倫理的配慮

調査の協力は自由意思であり、協力を拒否した場合であっても不利益は受けないこと、得られたデータは本研究以外で使用しないことを文書で説明した。本研究は、山口県立大学倫理委員会の審査を受けて実施した（承認番号:2022-16）。

Ⅲ　結果

1.基本属性等（表1）

男性は122人（20.2%）、女性は481人（79.8%）で

あった。

大専及び中専の学年別では、大専の2年生が280人（46.4%）と最も多かった。認知症の人とかかわった経験では、高齢者施設とした人が297人（49.3%）と最も多かった。認知症を理解した経緯では、学校の授業が449人（74.5%）と最も多かった。

2.認知症の人をケアするときの配慮（表2）

「思いや意欲を尊重する」「楽しさ、幸福を実現する」「なじみの関係を作る」「思い出を大切にする」及び「その人の世界観を重視する」については、80%以上が「重要である」とした。「かけがえのない一人の人として接する」「「○○ができない人」という理解をしない」「望む暮らしを実現する」「できる役割を実現する」「介護している家族の負担を軽減する」及び「社会全体で支える」については、「重要である」「まあまあ重要である」とあわせると重要視している傾向がみられた。しかし、上記の5項目と比較すると重要視している人がやや少ない傾向にあった。「「○○ができない人」という理解をしない」について、「わからない」とした人が61人（10.1%）であり、他の項目と比較するとやや多い傾向にあった。

3.認知症の基礎知識（表3）

認知症に関する基礎知識はある程度は理解できていたが、項目によっては理解の程度に格差がみられ、必ずしも全ての学生が正しい理解ができているとは言えない結果であった。最も理解ができていたのは、「認知症の原因となる病気で最も多いのは、アルツハイマー病である」が511人（84.7%）であった。

あまり理解ができていなかったのは、「中国は世界で最も認知症の人が多い国である」であり、「わからない」とした人が241人（40.0%）であった。認知症は、脳の病気である」「認知症になると、感情も失われてしまう」「認知症は、進行性の病気である」について正しい認識ができていた人は60%台であった。

4.認知症の人に対する支援の考え（表4）

「認知症の人の家族に対する支援が必要である」と思うとした人は534人（88.6%）と最も多かった。次いで、「認知症の人の支援は、地域社会全体で考えて行く必要がある」と思うとした人が511人（84.7%）であった。「家族が認知症になったら、近隣の人に知られたくない」と思わない人は406人（67.3%）であったが、124人（20.4%）の人が思うとしていた。「認知症の人の介護は、家族のみで行うべきである」と思うとした人は105人（17.4%）であった。

5.将来に対する考え方（表5）

539人（89.4%）の人が「認知症についてもっと学びたい」、363人（60.2%）が「将来介護の仕事に就きたいと思っている」、358人（59.4%）の人が「あなたの家族が認知症になったら自宅で世話をしたい」とした。

表1　基本属性等（n=603）

基本属性等		度数（人）	割合（%）
性別	男性	122	20.2
	女性	481	79.8
大専 / 中専　学年別	中専　2年生	86	14.3
	3年生	15	2.5
	大専　2年生	280	46.4
	3年生	158	26.2
	その他	64	10.6
認知症の人とかかわった経験（複数回答）	家族	72	11.9
	親戚	67	11.1
	知人	112	18.6
	通行人	86	14.3
	高齢者施設	297	49.3
	なし	221	36.7
認知症を学習した方法（複数回答）	本、インターネット	431	71.5
	学校の授業	449	74.5
	実習	166	27.5
	認知症に関するパンフレットと情報	278	46.1
	自宅や周囲で認知症の人	113	18.7
	よくわからない	47	7.8

表2　認知症の人をケアするときの配慮（n=603）　　上段:度数（人）　下段:割合（%）

項　目	重要である	まあまあ重要である	あまり重要ではない	重要ではない	わからない
かけがえのない一人の人として接する	407 67.5	121 20.1	23 3.8	14 2.3	38 6.3
これまで生きてきたその人の人生を大切にする	476 78.9	88 14.6	10 1.7	6 1.0	23 3.8
思いや意欲を尊重する	517 85.7	70 11.6	2 0.3	2 0.3	12 2.0
「〇〇ができない人」という理解をしない	414 68.7	85 14.1	30 5.0	13 2.2	61 10.1
望む暮らしを実現する	405 67.2	155 25.7	11 1.8	4 0.7	28 4.6
できる役割を実現する	428 71.0	135 22.4	13 2.2	4 0.7	23 3.8
楽しさ、幸福を実現する	511 84.7	68 11.3		5 0.8	19 3.2
なじみの関係を作る	523 86.7	63 10.4		1 0.2	16 2.7
思い出を大切にする	513 85.1	69 11.4		4 0.7	17 2.8
その人の世界観を重視する	498 82.6	83 13.8	7 1.2	1 0.2	14 2.3
介護している家族の負担を軽減する	430 71.3	132 21.9	9 1.5	6 1.0	26 4.3
社会全体で支える	432 71.6	122 20.2	23 3.8	2 0.3	24 4.0

表3　認知症の基礎知識（n=603）　　上段:度数（人）　下段:割合（%）

項　目	正　解	不正解	わからない
認知症は、脳の病気である	410 68.0	106 17.6	87 14.4
中国は世界で最も認知症の人が多い国である	287 47.6	75 12.4	241 40.0
認知症の原因となる病気で最も多いのは、アルツハイマー病である	511 84.7	30 5.0	62 10.3
認知症は、完全に治癒する病気である	56 9.3	431 71.5	116 19.2
認知症になると、感情も失われてしまう	117 19.4	402 66.7	84 13.9
認知症は、進行性の病気である	410 68.0	73 12.1	120 19.9
認知症は、65 歳以下の人は、発症しない	50 8.3	471 78.1	82 13.6

表4　認知症の人に対する支援の考え（n=603）　上段:度数（人）　下段:割合（%）

項　目	思う	思わない	わからない
認知症の人の介護は、家族のみで行うべきである	105 17.4	432 71.6	66 10.9
認知症に関する専門の相談機関が身近に必要である	478 79.3	40 6.6	85 14.1
認知症の人の支援は、地域社会全体で考えて行く必要がある	511 84.7	25 4.1	67 11.1
家族が認知症になったら、近隣の人に知られたくない	123 20.4	406 67.3	74 12.3
認知症の人の家族に対する支援が必要である	534 88.6	18 3.0	51 8.5
福祉系の学校で、学校が認知症コースを提供する必要がある	505 83.7	30 5.0	68 11.3

表5　将来に対する考え方（n=603）　上段:度数（人）　下段:割合（%）

項　目	思う	思わない	わからない
認知症のことについて、もっと理解を深めたい	539 89.4	19 3.2	45 7.5
将来は介護の仕事に就きたい	363 60.2	80 13.3	160 26.5
あなたの家族が認知症になったら自宅で世話をしたい	358 59.4	140 23.2	105 17.4

Ⅳ　考察

回答者の約80%が女性であった。中国湖南省の「高齢者サービスとマネジメント」を専攻する大専及び中専の性別比の現状と考えられる。介護は同性による介護が望ましいことからも、男性の入学者の拡大は必要である。そのためには、男性が「高齢者サービス・マネジメント」専攻を選択・進学できるように、明確なキャリアプランを示すことが必要である。

認知症を学習する方法では、74.5%が「学校の授業」、27.5%が「実習」とした。認知症の人をケアするときの配慮である「かけがえのない一人の人として接する」「「○○ができない人」という理解をしない」「望む暮らしを実現する」「できる役割を実現する」については、重要視する人がやや少ない傾向にあった。これらの4項目は、個人の尊重の理解と認識に関する事項であり、「パーソン・センタード・ケア」[5)6)]の考え方を基盤としている。

日本においては、高齢者介護の専門人材である介護福祉士の養成教育において、学内での演習は120時間、介護施設での実習は450時間必要とされている。また、2019年に介護福祉士のカリキュラム改革が実施された際、認知症ケアにおける日本の介護福祉士の実践能力を向上させ、すべての基本的な実践的知識を習得しながら高い倫理基準を維持することが強調された[7)]。

中国における高齢者介護の専門人材養成においても、実際の介護の現場において相当の実習時間を確保し、認知症の基礎的理解、ケアの理念や方法及び倫理について、さらに理解を深めることができる学習プログラムの開発が必要である。

学習プログラムの開発にあたっては、日本の介護福祉士養成の実績をもとに、湖南省の地域特性に即した介護人材養成モデルを模索・構築することが必要である。具体的には、短期的には湖南省の地域特性に合わせて認知症教育コースを整備し、上級サービス専攻を導入すべきである。長期的には、先進国の貴重な経験と科学的知識を吸収しながら現在の高齢者介護の専門人材養成システムを再検討し、小中学校や大学の学生向けにさまざまな認知症に関する学習プログラムを充実させることも必要である。

認知症の人の支援については、「地域社会全体で考えて行く必要がある」「認知症の人の家族に対する支援が必要である」「認知症に関する専門の相談機関が

身近に必要である」と思う人が多く、認知症の人やその家族に対して、社会全体での支援が必要と考えていた。湖南省においても、今後もさらに社会全体で認知症に関する普及啓発活動に取り組んで行く必要がある。

67.3%の人が「家族が認知症になったとしても、周りに知られたくない」とは思ってはおらず、このことは認知症の人を受け入れ、社会的に支援をしていく社会基盤があることをある程度反映していると考えられた。例えば、徘徊をする認知症の人を発見・通報し、認知症の人の日常生活上の安全・安心を確保するような社会基盤としてのシステムやネットワークの構築が必要である。

認知症についての学習意欲は高かったが、「将来は介護の仕事に就きたい」と思う人は60.2%にとどまっていた。大専及び中専の入学動機の不明確さも背景にあると思われる。現在中専の65%以上が大専への進学を選択しているが、その際に中専で学んだ専攻とは異なる専攻を選択している現状がある。進学する際には、進学後のキャリア教育の充実も課題と思われる。介護人材として働く意思のある学生には奨学金制度の充実を図ることも必要である。また、日本に介護技能実習生を派遣することで、中国に技能移転し、高齢者介護の専門人材として育成するキャリアパスも積極的に考える必要がある。

「家族に認知症が確認されれば、一生自宅で介護したい」とした人が約6割であったことから、今後高齢化が進展することを踏まえて、認知症高齢者が日常生活を円滑におくるソフトの面環境を整えることも重要な課題である。日本における「認知症施策推進大綱」や地域包括ケアシステムの理念や構築方法を参考に、中国の地域事情に合わせて、認知症施策を考えることが必要である。

Ⅴ　結論

湖南省の大専及び中専の学生は認知症の知識をよく理解しており、肯定的で正しい価値観と社会人としての意識を持っていた。これは湖南省の高齢者介護の専門人材養成のレベルを反映していると考えらる。認知症の人が今後増加していく中で、個人の問題から社会全体の問題として捉えていこうとする社会基盤があることも確認された。一方で、社会全体で認知症に関する普及啓発活動にさらに取り組んで行く必要がある。

今後、中国における高齢者介護の専門人材養成の課題として、「高齢者サービスと管理」を専攻する大専及び中専への入学動機を明確し、キャリア教育を充実していくことが必要である。また、認知症の人の家族の状況を当事者感覚として捉え、基本的な認知症ケアの理念や方法を深く学習する実習教育をさらに質量ともに充実していくことが必要である。

中国においては、今後ますます高齢化が進展することが予測されている現在、質と量を兼ね備えた高齢者介護の専門人材養成が最重要課題である。今後、湖南省の認知症ケアの実態を踏まえ、社会全体における認知症理解の普及啓発についても、日本の状況等と比較しながら総合的に検討を行うことが必要である。

本稿は、**中国湖南省民政厅「关于2022年度厅级课题的立项公示」**に対して応募を行い、中国語による報告書を提出し、提出した報告書に基づいて改めて考察を行い、日本語で論をおこしたものである。

文　献

1）国家统计局国务院第七次全国人口普查领导小组办公室:第七次全国人口普查公报.（2021）.
http://www.gov.cn/guoqing/2021-05/13/content_5606149.htm（access 2023.1.5）

2）中国老龄协会:认知症老年人照护服务需求快速增长（2021）.
http://www.cncaprc.gov.cn/llxw/192277.jhtml（access 2023.1.5)

3）上海市民政局,上海市财政局“关于印发《认知症照护床位设置工作方案（试行）》的通知”（2018）.
https://www.shanghai.gov.cn/nw12344/20200813/0001-12344_55600.html（access 2023.1.5）

4）湖南统计局:湖南省第七次全国人口普查主要数据情况（2021）.
http://tjj.hunan.gov.cn/hntj/tjfx/tjgb/rkpc/202105/t20210519_19037320.html（access 2023.1.5）

5）ドーン・ブルッカー(水野裕監修, 村田康子,鈴木みずえ,中村裕子訳）:VIPSですすめるパーソン・センタード・ケア.クリエイツかもがわ,京都（2010）.

6）トム・キッドウッド（高橋誠一訳）認知症のパーソンセンタードケア.筒井書房,東京（2005）.

7）厚生労働省（2018）:介護福祉士養成課程における教育内容等の見直し.
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index_00001.html（2023.1.5）

参考　中国語による調査票

问卷调查

一、基本信息
性　　别　男　女
目前身份　就读老年服务与管理专业中专 2 年级的学生
就读老年服务与管理专业中专 3 年级的学生
就读老年服务与管理专业大专 2 年级的学生
就读老年服务与管理专业大专 3 年级的学生
其它

二、请根据您目前的经历回答以下问题
1 截至目前，您是有否接触过认知症患者
家人　亲戚　身边的人　熟识的人　养老机构的老人　没有接触过
2 截至目前，您是通过什么途径知道认知症的
书本和网络自己查找的　学校的课堂上　实习期间　认知症相关宣传册和资料　家中、身边有认知症患者　不知道认知症是什么病

三、在认知症患者照护中，请根据您的想法判断各题的重要程度
3 把他当作是一个独一无二的人来对待
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
4 珍惜他所有的人生历程
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
5 尊重他的想法和意愿
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
6 不把他理解为“不会做○○的人”
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
7 帮他实现他想要的生活
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
8 帮他实现他可能的角色
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
9 帮他实现他的快乐与幸福
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
10 帮他创造熟悉的环境
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
11 珍惜他的回忆
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
12 重视他的人生观
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
13 减轻他的家庭成员的照护负担

重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚
14 全社会参与
重要　一般重要　不太重要　不重要　不清楚

四、请根据您了解的情况进行判断
15 认知症是脑部疾病
正确　不正确　不清楚
16 中国是世界上认知症患者最多的国家
正确　不正确　不清楚
17 认知症中最常见的是阿尔兹海默病
正确　不正确　不清楚
18 认知症是可以完全治愈的疾病
正确　不正确　不清楚
19 患认知症后，人将会失去情感（喜怒哀乐等）
正确　不正确　不清楚
20 认知症是一种进行性疾病
正确　不正确　不清楚
21 认知症在 65 岁以下人群中不会发生
正确　不正确　不清楚

五、请根据您的判断回答以下问题
22 对认知症患者的照护应仅由家庭成员进行
是的　不是　不清楚
23 身边需要专门的认知症咨询机构
是的　不是　不清楚
24 对认知症患者的支援，有必要结本地情况，从整个地区来考虑
是的　不是　不清楚
25 如果家人得了认知症，不想让身边的人知道
是的　不是　不清楚
26 有必要对认知症患者的家庭提供支援
是的　不是　不清楚
27 学校有必要开设认知症专业课程
是的　不是　不清楚

六、如果是您，怎么看接下来的问题
28 想了解更多的认知症知识
是的　不是　不清楚
29 将来想从事照护相关工作
是的　不是　不清楚
30 如果家人确诊认知症，希望在家照顾其一生
是的　不是　不清楚